

## 特集：金子肇『近代中国の国会と憲政：議会専制の系譜』をめぐる討論

以下の特集は、2019年8月25日（日）に広島大学霞キャンパスで実施した、広島中国近代史研究会の178回例会（金子肇『近代中国の国会と憲政』の合評会）の記録である。

わたしたちの研究会の創設期からのメンバーである金子肇は、財政問題という近代国家にとって極めて重要な問題を軸として、中国における中央と地方の関係について論じ、2008年に『近代中国の中央と地方：民国前期の国家統合と行財政』（汲古書店）を上梓した。それは中国がロシアを除くヨーロッパよりも大きな領土を有することを考えれば、極めて重要なテーマである。しかしながら従来の研究では、ともすれば中央政局にのみ分析を集中したり、地方の問題を単なるケーススタディとしてのみ取り上げ、中国史の全体的な議論と切り離す議論も少なくはなかった。こうした研究動向と比較して、中国政治の全体像を財政から見通そうとした金子の議論は、極めてユニークだった。

同時に金子は税政問題を切り口として、近代中国の都市に形成された中間団体について分析を深めるとともに、議会や憲法という民主主義制度の根幹となる問題についても検討してきた。前者についても、まもなく公刊されようが、今回上梓された後者のテーマに関していえば、従来の研究では政治思想史の文脈で議論されることが多かった。金子は政治史と思想史の架橋を目指し、従来の通説に大胆に挑戦する議論を展開しており、学界でつとに着目されてきた。今回の合評会はその成果の意義を改めて確認する目的をもって開催された。

書評会を企画するに際しては、日本史研究者からのコメントも求めた。それはわたしたちの研究会の方法的な特徴として、当然、個々人に濃淡はあるとしても、日本史研究をはじめ他領域の研究の方法に学ぶという「伝統」があることによる。実際、金子も本書において日本憲政史研究の分析手法を著者なりに咀嚼して、大きな成果をあげている。そしてこうした方法は、中国一國史にとどまらない、アジア史、さらには世界史としての広がりをも金子の仕事に与えている。わたしたちは書評会を通じて、わたしたち自身の方法を深化させ、広い視野を獲得することを目指した。

なお本文中の [ ] は当日の発言を補うために編集委員で付したものである。

丸田孝志（広島大学大学院 以下、丸田）

司会を務めます広島大学総合科学研究科の丸田です。本日は、広島大学文学研究科の金子肇先生の近著、『近代中国の国会と憲政：議会専制の系譜』について合評会を開催させていただきます。広島中国近代史研究会では、2010年と14年にも清末から中華民国初期の憲政と日本との関係をめぐる曾田三郎先生の2冊の著作についての合評会を行ったことがあります。これが『拓蹊』1号、2号に収録されています。その際には、日本史の研究者の方にも評者として出席いただき、日本史からの視点も交えて活発な討論が行われました。本日も日本史の方から幕末・明治維新期の日本の自己認識・世界認識について研究されている、広島大学文学研究科の奈良勝司先生を評者としてお迎えしました。また、中国史の方からは、関西学院大学文学部の森川裕貫先生をお迎えしました。森川先生は、中国の変革や自由な言論の問題について特に政治制度の視点から議論を展開した近現代の知識人について研究されています。お二人とも幅広い国際的な視点から歴史研究を進められている研究者で、金子先生の著作に対して、様々な視点から活発にご議論をいただきたいと思います。

まずは金子先生に15分程度でご自身の著書についての概要説明をいただき、それから奈良先生、森川先生の順に40分ずつの書評報告をいただき、それに対して金子先生からの応答を20分程度、最後に全体討論という形で進めたいと思います。皆様の活発な討論をお願い致します。

### 『近代中国の国会と憲政－議会専制の系譜－』で意図した問題提起 金子肇

金子肇（広島大学大学院 以下、金子）

今日はこういう機会を設けていただきありがとうございます。忌憚のないご意見をいただけたらと思います。最初にお手許に届いていると思いますが、A4の用紙に本書の執筆者として、この本でどういう点を強調したかったか、あるいは何を問題提起したかったのかということを4点に分けて整理しておきましたので、最初にご紹介させていただこうと思います。8月の最初に東京の東洋文庫でも書評会を開いていただきましたが、その時に提出したレジュメに少し加筆したものが、お手許のA4の資料になります[当日の配布資料は奈良・森川両氏のものも含めて、38～45頁に掲載した。ただし本誌の書式に揃えた]。

さて、その4点ということですが、まずこの本で意図したことの第1点としまして、近代中国政治史の系統的な再構成を意図して書いたということがあります。近年、若い人を中心に、檔案史料を使い個別的な歴史事象を明らかにする研究は、大量にというほどじゃないかもしれませんが、かなり蓄積されてきている。しかし、単に個別的な実証を積み重ねていけば、何か新しい中国近代の政治のあり方や社会のあり方が見えてくるのかと言うそうではない。歴史像の再構成には直結しないってことです。そのためには、意図的にかどうか意識的に、何らかのテーマを追求することが必要なのではないか。その意味で、こ